

「窓」は何に面しているのか

— アンドレ・ブルトンの「窓」補説 —

藤 本 恭 比 古*

はじめに

アンドレ・ブルトンの諸作品にあらわれる「窓」のイメージは、「窓」のテーマを形作っている。しかしかのイメージを年代順にとりあげて注釈を試みることもできるかもしれないが、こうしたイメージが決定的な価値を帯びるためには、むしろ詩的電荷が必要である。その負荷がおこなわれたのは、作品『ナジャ』（1928）においてであった。以降、「窓」は単なるイメージではなく、通過儀礼の通路という隠喩的機能を担うことになったように思われる。ブルトンは生涯にわたって絶えず、命がけで自分自身を捜し求めていたが、彼は作品の中で、窓から意志的な跳躍をおこなって、一旦は死に、しかる後に変身を遂げて蘇る。こうしたイニシエーションが、彼の生涯の中で何度かおこなわれたことは、多少ともブルトンの作品に親しんだ向きには、よく知られた事実であろう。われわれは、『ナジャ』から『通底器』を経て『狂気的愛』（さらに『秘法 17』）へ至るブルトンの自伝的作品群の中で、「窓」が果たす役割を解明することを目的としているが、今回 2006 年 11 月に長崎外国語大学でおこなった口頭発表「アンドレ・ブルトンの窓」¹⁾ に対して編集委員会から寄せられた形式上のご指

* 福岡大学人文学部准教授

摘に応じて原稿を書き改めたものの、内容上のご意見に対しては紙幅が限られていたため、本稿で補説を試みた。またそれをアンドレ・ブルトンの『通底器』における窓のテーマに接続させた。

「窓」は何に面しているのか

自動記述の発見とその適用による『磁場』の制作（1919）にはじまり、パリにおけるダダ運動との合流と決裂を経た後、1924年10月、『シュルレアリスム宣言』の刊行、シュルレアリスム研究所の開設とともに、シュルレアリスム運動は正式に発足した。後に「純粹に直感的な時期」と呼ばれることになる最初の5年間、シュルレアリスムは自動記述の定義とほぼ一致しており、まだ内部世界への自閉的傾向が見られた。しかしながら1925年以降、『宣言』で予告されていた「シュルレアリスムの行動への適用」²⁾が、ブルトンらシュルレアリストたちによって、政治的な平面での諸活動や外部世界におけるメルヴェイユ驚異の探索といった詩的平面での諸活動を通しておこなわれることになり、運動は「理性的な時期」へと移行する。ブルトンはその諸活動を私的な体験を中心に記録し、報告した。それが作品『ナジャ』（1928）であり、また『シュルレアリスム第二宣言』（1930）の後に書かれた『通底器』（1932）である。この時期のシュルレアリスムの基本思想を総括的に伝えているのは、ベルギーで1934年6月におこなわれたブルトンの講演、『シュルレアリスムとは何か』（1934）である。その一節にあらわれる「窓」は外部に向けて開け放たれているが、その外部とは決して超越的な世界ではないことが明確に示されている。

その名称（シュルレアリスム）から直接感じられるある種の曖昧さは、それがなにか超越的な態度を指し示しているように思わせかねないことであります。ところが逆にそれが表しているのは、——われわれにとっては最初からそうでしたが、——現実を深めんとする意志、感覚世界のますます

鮮明な同時にますます熱烈な自覚にほかなりません。シュルレアリスムの進化全体が、（中略）その起源から今日にいたるまで、われわれから離れず、日ましに切実の度を加える配慮によって裏書されています。それは、いかなることがあろうとあるひとつの認識体系を安全地帯とは見做すまいとする配慮、すべての窓を外部に開け放してわれわれ自身の探求を継続し、それらの調査の結果が街路の風に直面する性質のものであることを確認せんとする配慮であります。³⁾（下線による強調は筆者）

ここで明らかにされていることを繰り返せば、シュルレアリスムは、現実の深化と感覚世界の意識化を目指しているということである。それはいかなる超越的な態度とも無縁であることを意味している。「窓を外部に開け放す」、「街路の風」云々という隠喩表現が示しているのは、シュルレアリスムの「認識体系」は閉じられた「安全地帯」ではないし、その探求は、実人生における検証に耐えうらということである。端的にいえば、究極的にシュルレアリスムが目指しているのは、「内部現実と外部現実の究極の統一」であり、これこそが超現実には他ならない。ブルトンによれば、内部現実と外部現実、「合体化の途上にある、二つの潜在的な統一要素」であるが、それらは「現代社会では矛盾している」以上、「両現実の相互的な引力と相互浸透の働きを把握し、触れ合った両現実が互いのうちに溶け合うようその働きを望ましいだけ増大することを可能にする体系的な仕方、かわるがわる両現実に関わりかけてきた」⁴⁾ というのである。これが、『通底器』で達成された力業である。

『ナジャ』の時期に戻ると、同じ時期に書かれた『シュルレアリスムと絵画』（1928）にも、窓の比喩があらわれる。

そんなわけで、私にはひとつのタブローをひとつの窓として見る以外

は不可能であり、まず関心があるのは、その窓が何に面しているのか、いかえれば、私のいるところからの『眺めは美しい』のかどうか、を知ることなのだ。そしてなによりも、私の前に見わたすかぎりひろがっているものが好きなのだ。⁵⁾

ブルトンの場合、絵画は窓に見立てられ、その窓ごしにひろがる眺望の美しさが問題である。ところで、ブルトン場合、芸術の目的を模倣とみなし、何かのイメージの再現をおこなうことが芸術であるとは考えない。絵画や彫刻の題材に関して、「おかされていた過ちは、モデルを外部世界からしかえらべない、単に外部世界からえらびうると考えていたことである」と述べた後、ブルトンは外部世界を捨象し、「造形作品は、こんにちあらゆる精神が一致してもとめている現実的諸価値の徹底的な再検討の必要にこたえるために、純粹に内的なモデルをよりどころにするだろう。それいがいにはないだろう」⁶⁾と明言している。そういうわけで、「内的なモデル」とは何か、はっきりと定義されているわけではないが、シュルレアリスムの絵画に関しては、窓は内部世界にむかって開かれていると言ったほうがよいだろう。

『シュルレアリスムと絵画』(1928)には、超現実とは現実そのものの中に含まれているという内在性の哲学が披露されている。

私の愛するすべてのこと、私の考える、感じるすべてのことが、内在性についてのある特別な哲学に私の心をむかわせ、それにしたがえば、超現実とは現実そのものなかにふくまれるだろうし、現実そのものよりも高次でも外部的でもないだろう、ということになる。そしてその逆も真であろう。というのは、ふくむものはまたふくまれるものでもあるだろうからである。問題はほとんど、ふくむものとふくまれるものとのあいだの通底器であろう。これはつまり、絵画の次元でも文章の次元でも、生活から思考

を切りはなしたり、また生活を思考の庇護下においたりする結果を狭小なかたちでまねきうるような試みを、私が全力で拒絶しているということである。⁷⁾

作品『ナジャ』は、こうした内在性の哲学と同時に成立した作品といえる。ナジャの物語終結部のブルトンの悲痛な叫び——

誰がいるのか？ あなたなのか、ナジャ？ あの世が、あの世のすべてがこの人生のなかにあるというのは本当か？ 私にはあなたのいうことが聞こえない。誰がいるのか？ 私ひとりなのか？ これは、私自身なのか？⁸⁾

超越的であるはずの「あの世」(l'au-delà) が、「この人生」のなかに含まれているとするこの考えは、まさしく内在性の哲学の所説に他ならない。マルグリット・ボネ氏の指摘によれば、「ここで言及されているあの世は、いかなる超越性にも回付されない」⁹⁾という。したがって、巖谷國士氏が指摘しているように、¹⁰⁾ 宗教的な含みもない。引用文の解釈に関して、巖谷氏はさらに、「ナジャが到達し、ブルトンもナジャに導かれて身を置くことのできた地点（「遠く地上から投げ出されながら」）が、まさにこの人生（この世）のなかにあるのだという確信を、ナジャからはなれたいま、以前のようには得られなくなっているのだ」と続けている。ただ、ボネ氏は、巖谷氏が「ナジャが到達していた地点」と記している一節にはほぼ対応する文章で、「地点」ではなく、「この精神の点」(ce point de l'esprit) と記している。おそらくボネ氏は、ブルトンの『第二宣言』(1930) のはじめに掲げられた、あらゆる二律背反が解消して感じ取られる「精神の点」の概念を援用していると思われる。

「生と死、現実と想像、過去と未来、伝達可能なものと伝達不可能なもの、高いものと低いもの、すべてがそこから見るともはや矛盾したものとは感じら

れなくなる精神の一点が存在するように思えてならないのである。』¹¹⁾ この一節は、ミシェル・カルージュ氏によって、神秘主義的な解釈が付与されてきたものだが、¹²⁾ それがたとえいかに神秘主義的に見えようとも、それに続く「その精神の一点を確定しようとする希望以外の動機をシュルレアリスム活動に求めても無駄である」というブルトンの断言は、あくまでユマニズムの立場から発せられたものであることに注意したい。

また、ブルトンには「彼岸へと開く小さな窓くらいは残しておきたい」という願望があるのではないか、というトロツキーの疑いは、ひとつにはブルトンが頻繁に神秘主義的な傾向をもつ事例を取り上げることからきているように思われる。しかし、憑依状態のナジャの例に関して言えば、ブルトンは人間ナジャには興味をもってはいても、死霊の存在は豪も信じていない。彼にとって重要なのは、シュルレアリスムの精神をそうとは知らずに、そのまま生きているナジャという実在する女性の詩的な言動、彼女が残したデッサン、文章なのである。

彼女の失踪とともに、ブルトンはもはや、彼女が見せてくれた驚異^{メルヴェイユ}にみちた世界を現実のバリのどこにも見出すことはできない。それは、現実のバリのなかに潜むもうひとつのバリであった。ブルトンの窓は何に面しているのか。それは、現実の世界と、その中に潜在しつつ、束の間、立ちあらわれては消えてゆく超現実の世界に面しているのである。ブルトンは、以降、作品の中で何度も窓辺から意志的な跳躍をおこなうことになる。

ブルトンの窓とそれが面している世界について記された決定的な記述を引用しておきたい。1927年9月27日にブルトンが決して報われることのない愛を捧げたリーズ・デュアメルに宛てた最後の愛の手紙に書き付けたものである。

この世界にふくまれている別の世界 (...)、私たちは古い家に住んでいるが、そこではどの窓もどの扉もふさがれてはおらず、いつか昼もなく夜もなくなる時が来れば、すべてが開けはなされるだろう。¹³⁾

『通底器』の窓

『ナジャ』の四年後に刊行された『通底器』の終結部で、語り手は窓辺にいる。そこから、髪をきらめかせた女性に具現した「真実」があらわれるのを想像する場面（「そして、そのとき真実は、光の波にきらめくその髪の毛をたなびかせながら、人々の黒い窓辺を訪れることだろう」¹⁴⁾で、作品は幕を閉じるのである。ところが、窓からの意志的な跳躍が作品中でおこなわれ、見事にイニシエーションが成し遂げられたことを記録した作品が、『狂気的愛』第四章を構成することになる『向日葵の夜』¹⁵⁾という作品である。その冒頭は、次のように記されている。

私はこの跳躍をおこなうことをためらっている。そのことは認めねばならない。果てしない未知のなかに陥るのではないかと恐れているのだ。あらゆる種類の影たちが私の周りに^{ひし}轟めきあい、私を妨げ、私にはとても壊しようのない高い壁で私に抵抗してくるのだ。これらの影には、私の人生のとくに感動的な挿話のひとつを解明できないようなものはなにひとつ混じっていない。¹⁶⁾

ここでは、窓という語は全く記されていないが、マラルメの初期詩篇「窓」の結びの詩句（「たとい永遠に落下し続ける危険を冒すとしても」¹⁷⁾を喚起する文章、「果てしない未知のなかに陥るのではないかと恐れているのだ」のおかげで、この一節が実は、窓辺の場面をあらわし、ブルトンの窓のテーマの一環をなしていること、そして『通底器』の終結部と連鎖していることが推測可能となり、その確証を得ることができる。この「向日葵の夜」という作品は、1934年5月29日にブルトンが実際に体験した出来事がもとになっている。冒頭に引用したブリュッセルでの講演がおこなわれたのは、その翌月である。リー

ズ宛の1927年9月付けの愛の書簡からもわかるように、開け放たれた窓は、高揚した愛のしるしでもある。

そういうわけで、相互的愛の成就を主題とした「向日葵の夜」を含む『狂氣の愛』という作品は、その点で、愛の対象としての存在の喪失と、その不在が引き起こした語り手の苦悩によって特徴づけられる『通底器』とは際立った対照をなしている。そのため、この両作品の世界はそれぞれ、ブルトンの内なる天国と地獄と見做すことができるほどである。その意味では、『通底器』という作品全体を通して「窓」は不在であり、その終結部にあらわれた「窓」は、地獄めぐりという試練の果てにブルトンが辿りついた、もうひとつのイニシエーションのはじまりを示すしるしなのである。

『通底器』で記述されているブルトンの伝記的諸事実に関して言えば、その第一部では、ブルトンの夢が主にフロイト理論によって現実と関連づけて分析され、第二部では、現実世界における彼の行動が、フロイトの夢理論と、エンゲルスの客観的偶然の理論の援用によって説明される。本稿では、第一部の夢の分析についての考察はひとまず置き、第二部で記録されている客観的偶然の現象が、どのように記述され、理論化されているのか、「窓」のテーマと合わせて考えたい。

1：サムソンとデリラ

エグジスタンシアリスト
実存主義者として知られる、シモーヌ・ド・ボーヴォワールは、シュルレアリスト
超現実主義者のブルトンよりも十歳ほど下の世代に属する。その自伝的作品に見られるように、¹⁸⁾彼女は、その自己形成期にシュルレアリストたちの言動に対して常に関心を寄せており、その後も同時代人として、彼らと関心事を共有することがしばしばだった。『第二の性』の第三部、神話において彼女は、かなり好意的にブルトンを取り上げ、その作品の中で女性が果たす啓示的役割を論じている。そこでは、件の客観的偶然の現象を描いた『通底器』第二部の文章が要約された上、

もっぱら ^{ポエティック} 詩的な観点から説明されており、その出来事は「ささやかな奇跡」と形容されている。

（…）ブルトンにはすぐに、彼女（『狂気的愛』に登場する実在の女性—筆者注）が自分の運命において何らかの役割を演じることがわかる。時には『通底器』に出てくるデリラの目をした少女のように、束の間の脇役にすぎないこともある。そうした場合でさえ、彼女のまわりにはささやかな奇跡が起こる。ブルトンは、このデリラと会う約束があったその日に、久しく会っていなかった、しかもサムソンという名の友人の署名入りの好意的な記事を目にする。¹⁹⁾

ブルトンが当時おかれていた状況を、ブルトンのテキストに即してもう少し詳しく見ておく必要があるだろう。

1931年4月21日火曜日、早い時間に、ある雑誌の編集長から一通の手紙がブルトンに届けられる。²⁰⁾ その中には、『シュルレアリスム第二宣言』（1930）について誤解も含め深い共感を示した論説が同封されており、それに返事を書くようにブルトンは要請される。論説の署名は、第一次大戦のはじまり以来、手紙のやりとりすらなかった旧友、J-P・サムソンのものであった。ブルトンはこの人物の人となりに対して率直な好意を示している。

偶々、同日、ブルトンは、十日ほど前に知り合った少女で、若年の頃より偏愛してきたギュスターヴ・モローの作品「サムソンとデリラ」²¹⁾ (1886) の、デリラのような美しい目をした少女と昼食の約束を交していた。彼女は待ち合わせの場所に姿をみせなかったが、彼女との出会いのおかげで、久しく失っていた「外的生活との接触を回復できた」²²⁾ ことにブルトンは深い感謝の念を抱いている。

ボエヴォワールが ^{ポエティック} 詩的な観点から説明している上の挿話は、作品『ナジャ』

においてであれば、「人を唾然とさせる偶然の一致」²³⁾ (pétrifiantes coïncidences) と呼ばれる現象に属するものである。それに対して、『通底器』では、ブルトンは、エンゲルスの「客観的偶然」²⁴⁾ (le hasard objectif) の概念を援用することによって、それを理論的に裏づけ、科学的な分析を加えようとしているように見える。ところが、ブルトンの説明は、周囲の仲間から神秘主義的と評され、ブルトン自身も、その時の自分の考えを「解釈妄想と紙一重」と判断するに至る。こうした過程をブルトンが克明に記述しているおかげで、その解釈妄想までそのまま定着した文章を通して、われわれはブルトンの理路と、そこからの逸脱を確認することができるのである。

まず初めに言えることは、ブルトンが、サムソンという旧友からの論文を受け取った日に、デリラのように美しい眼をしている少女と会う約束をしていたという、この二つの出来事が、偶然の一致と呼べるのは、言うまでもなく、「サムソンとデリラ」という二つの名をふくんだ旧約聖書の物語が存在しているからに他ならない。ここで重要なことは、その偶然の一致が、単なる偶然の一致ではなく、どの程度「人を唾然とさせる」偶然の一致であるかを知ることである。ポーヴォワールは、知的な理解に立った上で、比喩的な意味で、二つの名の偶然の一致を、「ささやかな奇跡」と呼んでいる。他方、当時のブルトンにとって、二つの名は、それぞれ彼の公的かつ私的な関心事と密接に結びついていたので、そのぶん感情的要因を含んでおり、文字通り「人を唾然とさせる」驚異的な偶然の一致だったのである。

ところで、ブルトンの旧友サムソンの、予期せぬ手紙に同封されていた論文の内容は、この時期ブルトンが苦慮していた政治的決断に対して、逆説的な仕方活路を開くものとブルトンには思われた。具体的に言えば、ソヴィエトですすめられている反宗教的キャンペーンに呼応して、フランス共産党の指揮下で同様の行動を実行に移すかどうか、シュルレアリストたちの間で議論を重ねる中、ブルトンは決断を先送りしていた。ところが、その論文のおかげで、議

論は活性化し、彼は決断を下すことができたのである。

ブルトンによれば、サムソンはシュルレアリスムに対して、次のように異議を唱えているという。シュルレアリストは自分たちの意に反して常に神秘主義者であり続けるだろうし、「神秘」なるものがシュルレアリストをひきつけているあの強い吸引力は、「シュルレアリスムの無神論にもかかわらず宗教的と規定せざるを得ないある種の精神状態」²⁵⁾ を如実に物語っている、と。

しかしながら、このサムソンの異議には、明らかにシュルレアリスムに対する誤解が含まれている、とブルトンは主張する。それは、シュルレアリスムが神秘主義であるという誤解である。ブルトンは、彼に直接説明することによって、その意見を撤回させることが可能であると確信してはいるものの、シュルレアリスムの宗教性についての指摘は、じっさいある意味では核心をついており、結局ブルトン自身、それを次のように認めることになる。

おそらく当時、すべてのものが反宗教的活動を中心としてその周囲に集まってくるように思われたということであろう。このことも逆説的なことでは全然ない。というのも、私にとって一時的に到達不可能な存在になっていた女性というものは、私の思考の中では特別な崇拜の対象、はっきりと偶像崇拜の対象としてのみあり、私はこのような非人間的な逸脱に抵抗せねばならなかったからだ。それゆえ、反宗教的活動は、私が友人たちと共に認めていたその客観的な価値とは別に、きわめて特殊な主観の意味もっていたのである。²⁶⁾

作品『ナジャ』の終結部に突然あらわれ、語り手のブルトンから「君」と呼びかけられている、Xと名づけられた女性こそ、ブルトンが「偶像崇拜の対象」としていた実在の女性であるが、たしかに『ナジャ』を一読すれば、この女性に対する詩人の情熱は、まぎれもなく、サムソンの主張する「無神論にもかか

ならず、宗教的と規定せざるを得ないある種の精神状態」にまで高められていることが分かる。

もっとも、サムソンの主張が依拠しているブルトンの作品は、『シュルレアリスム第二宣言』である。そこで展開されているブルトンの所説には、その本文のかなりの部分を占めるポレミックな政治的言説とは明らかに異なる文章が含まれている。「わたしが望んでいるのは超現実主義の真正・深奥な秘教化である」²⁷⁾ という宣言に代表される隠秘学（占星術、錬金術、魔術）への傾斜について述べられた箇所である。サムソンの論拠はここにあるのではないかとくに、その欄外の注に明記されている、「シュルレアリスムの秘教化の可能性」として「愛をすべての思考の理想的な秘教化の場所と見做す」²⁸⁾ という文言は、見逃せない。

したがって、反宗教的活動は、シュルレアリスム運動が当初から教権主義とその教義に対しておこなってきたはずであるにもかかわらず、この時期マルクス主義に基づく政治的な反宗教的活動にブルトンが踏み切れなかった理由は、公的には主として、全面的にこの運動に奉仕することによって、シュルレアリスム独自の活動をその中に解消してしまう懸念によるものであり、私的には、サムソンが論説で指摘したシュルレアリスムの宗教的性格、とりわけブルトンが自身の偶像崇拜的な愛の在り方に抵抗したために生じた心理的葛藤に求めることができるだろう。これこそが、ブルトンにあって、「反宗教的活動」がもっている「きわめて特殊な主観的意味」である。

2：人を啞然とさせる偶然の一致から客観的偶然へ

ブルトンが『通底器』で述べている以上のような外的・内的な状況を視野におさめた上で具体的に考えると、サムソンの手紙は、二重の意味で、ブルトンに「人を啞然とさせる偶然の一致」として作用したのである。

- 1) スイスから届いたサムソンの論文の内容と、おそらくその論文が書かれていた頃にブルトンの関心を惹いていた事柄との偶然の一致。
- 2) サムソンという久しく耳にしなかった旧友の名前が署名された論文をブルトンが読んだ朝、同日の正午にデリラのように美しい眼をした少女と偶々昼食をする約束をしていたことによる二つの名前の偶然の一致。

1) の偶然の一致に関して問題になるのは、ブルトンの神秘主義的傾向である。上の偶然の一致について、二つの事柄の間に因果関係が存在する旨を力説するブルトンに対して、周囲のシュルレアリストたちは、「目に見える関係はなにひとつない」として、彼の考えを神秘主義と規定した。

確かに仮にこの二つの事柄になんらかの関連があると考えれば、サムソンが、何故ブルトンの著作を読んだのか、反宗教運動の動向を知っていたのかどうか、何故ブルトンの著作に関する論文を執筆し、それを雑誌の編集長に送ったのか、といった諸事実を明確にはじめて、互いに関連があるとは思われない事柄の間にも因果関係を見出すことができるのではないか。ところが、ブルトンがわれわれにもたらしているデータはといえば、論文を読んだ時に蘇ったらしい執筆者の「真っ直ぐなまなざし」²⁹⁾ というサムソンの人柄に対する好意的な彼の評価を除いては、二人の間には時間的・空間的な隔りがあること、それゆえ長い間いかなる交流もなかったし、当時もなかったことを強調するデータだけである。こうしたデータはすべて、ブルトンの神秘主義的主張を補強することにしか貢献していないように思われる。

ジャン＝ポール・サムソン（1894～1954）は、プレイアッド版ブルトン全集に付された注によれば、³⁰⁾ ブルトンのもっとも古い友人のひとりで、パリのシャブタル高等中学校に在学中（1906～1913）は、ブルトンと同級だったこともある（1911～1912）。反軍国主義者で、1913年、社会党員となり、ツィンマーワルト的な思想に賛同。³¹⁾ 召集されて兵役につくが、第一次世界大戦の勃発後、

1917年秋に軍より脱走、国境を越えスイスに亡命、そのまま永住した。彼は韻文作品と散文作品、それに翻訳も残している。そのすぐれた個性は論説において際立っていた。とくに『レ・アンブル』誌ではそうだった。彼は1953年から『テモワン』誌を主宰した。この雑誌の執筆者には、ヴィクトール・セルジュ、ピエール・モナット、アルベール・カミュ、ルネ・シャールなどがいる。

すでに述べたように、サムソンは、1930年6月に刊行されたブルトンの『シュルレアリスム第二宣言』について執筆した論説を、1931年4月、『レ・アンブル』誌の編集長、モーリス・ヴェーランに送るが、それは同誌1931年5月号に掲載されることになる。その号は、ジャン・ベルニエの執筆した反ブルトンの『第二宣言』の書評も掲載されているが、その掲載の理由は、そもそもこの書評が、サムソンのベルニエに対する激しい反応を引き起こしたためらしい。ジョゼ・ピエール氏によれば、³²⁾単行本として『第二宣言』が刊行された後、この文書について書かれた数々のまともな研究論文は、主にシュルレアリスムとマルクス主義の関係を問うものだったという。ところが、1931年3月に『社会批評』誌1号に掲載されたジャン・ベルニエのものだけが、ブルトンに敵対的で、非難は自動記述からシュルレアリスムのフロイトの参照にまで及び、フロイトとマルクスの総合の試みはまちがってはいないが失敗しているとして、人身攻撃的な論争の箇所に「このパンフレットの中にあるきわめて偏執狂的な活力」を見ているという。それとは逆に、サムソンは、ブルトンが「弁証法的唯物論」に賛同していることを真摯に受けとめてはいるが、シュルレアリストたちの中に残存しているロマン主義的なものを強調することも忘れてはいない。そのロマン主義には幾分か「神秘主義」も残っている。しかし、いずれにせよ、ブルジョワ出身であろうがなかろうが、シュルレアリストたちが革命的であることに疑いを容れないというのである。

こうした諸事実に照らせば、思いがけないサムソンの手紙が、マルキストたちの中であってシュルレアリストとして孤立無援だったブルトンをどれほど勇

気づけたか、窺い知ることができるだろう。何故この時期にサムソンの手紙が届いたのか、こうした経緯は、既に『レ・アンブル』誌の編集長からの手紙で彼に知らされていただろう。しかしながら、こうした諸事実の連鎖の因果関係が目に見える形で解明されたとしても、1) の偶然の一致からブルトンが蒙った驚愕の度合は、あまりに大きかったのだろう。『通底器』第二部を執筆していた時点で、ブルトンにとって重要だったのはむしろ、1931年4月21日火曜日の朝以来、しばらくの間、サムソンの手紙が彼に及ぼしつづけた魔術的效果のほうだったのではないか。その影響下にあって彼は、単なる偶然の一致ではなく客観的偶然の現象として、いかにそれを記述し解明するか、ということに苦心していたように思われる。

人々は言うに違いない、因果関係は、この方向では成立し得ないだろう、スイスからあなたに届けられたしかじかの手紙と、この手紙が書かれた頃多分あなたの関心を惹いていたしかじかの事柄の間には、目に見える関係は何一つ存在しはしないのだ、と。しかし、それに対して私はこうたずねよう、それはきわめておかしい形で因果関係の概念を絶対化することではないのか、それはエンゲルスの言葉、「因果関係は、必然性の顕現形態である客観的偶然というカテゴリーとの関係において、はじめて理解することができる」という言葉を余りにも軽視することなのではあるまいか、と。さらに付け加えるなら、それに、もっと進んで言うなら、サムソンというこの名前、もう何年も耳にしたことなかったこの名前は、その朝とつぜん私の目に飛びこんでくることによって、水のような眼をした少女、すでに言ったがデリラを思わせる眼をもったあの少女を、まさしく私に思い出させはしなかっただろうか。たとえこのことが或る人々には解釈妄想と紙一重のものに映ろうとも、私はいっこうに構わない。当時の私の理性にはほとんど均衡が欠けていたということはすでに強調していたからだ。³³⁾

「スイスからあなた（ブルトン）に届けられた手紙」と、「この手紙が書かれた頃多分あなた（ブルトン）の関心を惹いていたしかじかの事柄の間」に、ブルトンは因果関係が成立すると考える。ところが、他のシュルレアリストたちは、二つの事象の間には「目に見える関係は何ひとつ存在しない」と言う。すなわち、彼らにとって、それらは単なる偶然の一致にすぎないのである。

もしかすると、ブルトンが成立すると主張している因果関係は、C. G. ユングが「共時性」³⁴⁾として説いているところの「非—因果的連関」に相当するのではないだろうか。しかも、ユングは、「共時性」を「意味のある偶然の一致」とも言っているのである。

サンクロナシテ共時性とは、類似あるいは同一の考えや夢などが、同時に異なった場所で生じることである。その一致はどちらも因果的に説明することはできないが、無意識の中で活性を帯びた元型的な過程と本質的に関連していると思われる。³⁵⁾

じっさい確かに、この現象は、ブルトンが主張する「サムソンの手紙」の例にぴったり一致していることがわかる。同一の考えが同時に異なった場所で生じるという現象だからである。次に、二つの事象の一致はどちらも因果的に説明することはできない、という断言は、この現象が科学的に実証できないということの意味している。ただ、おそらくブルトンは「無意識の中で活性を帯びた元型的な過程」という考えを認めないだろう。というのも、『通底器』の中で、ブルトンは容赦なくユングの「抽象的思弁」を批判しているからである。³⁶⁾ここでは、ユングの「共時性」のおかげで、ブルトンが是が非でも通そうとしている「因果関係」という言葉に明解な科学的説明が与えられただけで十分といえるだろう。

要するに、ブルトンにとって、二つの事象は単なる偶然の一致ではなく、む

しろ「人を唾然とさせる偶然の一致」であり、なんらかの^{目には見えない}因果関係で結ばれた「必然性の顕現」として感じられたのである。これは、魔術的な因果関係に他ならない。解明すべき問題は、まさにここにある。エンゲルスから借用した「客観的偶然」という言葉を用いることによって、ブルトンは、『ナジャ』で既に詳しく記述されている「人を唾然とさせる偶然の一致」を弁証法的唯物論の思考の枠内に取り込み、それを理論的にさらに深化させる方向を取ろうとする。ブルトンとユングは、全く異なった精神で偶然性の問題に取り組んでいたといえる。

ところで、『通底器』の中の他所で用いられている必然性という語は、自然的必然性（あるいは自然の大いなる物理的必然性）³⁷⁾と、人間的必然性あるいは論理的必然性に二分される。³⁸⁾ それでは、客観的偶然であるところの「必然性の顕現形態」の必然性とは、人間的必然性であろうか、それとも自然的必然性であろうか。じっさいには、それは、その両方の間のあらゆる中間段階にあると思われるが、ブルトンと他のシュルレアリストの意見の相違も、まさにこの点にかかっていると思われる。

したがって、「この因果関係は、この場合どれほど人を当惑させるものであらうと、たんにそれが普遍的な相互作用に依拠しているという理由によってだけでなく、またそれが確認されたという理由によって、現実的なものなのである」という重要な一節は、別の言い方をすれば、人を唾然とさせる偶然の一致は、自然的必然性に基づいているだけでなく、また人間的必然性にも基づき、それが偶然として確認されてはじめて、現実的なのである、と読むことができるのではないか。このように考えると、ブルトンが「人間的必然性」の方に力点をおいていることがわかる。そうであるからこそ、彼は、スイス在住のサムソンの「真っ直ぐなまなざし」を手紙の文面から鋭敏に感じ取ったのではないだろうか。そして、遠く離れたバリのブルトンに対してサムソンがいただいている深い理解と共感を直感的に理解したのである。おそらく、それほどまでブル

トンとサムソンの互いの共感が高まっていた。実際にブルトンが体験した出来事で、この種の「共感」のもつ力によって惹き起こされた驚異的な諸事実を、われわれはブルトンとスーポーの例、あるいはブルトンとジャコメッティーとの例にも見ることができる。³⁹⁾

かくして、1) の偶然の一致に2) の偶然の一致がさらに付け加わって、人を嘩然とさせる偶然の一致が複合したため、ブルトンは一時的に解釈妄想すれすれの状態にあったらしい。過剰な想像力は、外部世界へ開いた窓を閉じてしまうことがある。この窓のない状態をブルトンはペトリュス・ボレルの詩から引用した言葉で、「僧院」⁴⁰⁾ と呼んだ。

(2007年9月)

注

- 1) 九州フランス文学会「フランス文学論集」第42号、2007年11月。
- 2) *O.C. I*, p.334.
- 3) *O.C. II*, p.230-231. 邦訳は、『アンドレ・ブルトン集成5巻』(人文書院)所収、生田耕作訳「シュルレアリスムとは何か」、284頁。
- 4) *O.C. II*, p.231. 邦訳に多少変更を加え引用。
- 5) André Breton, *Le Surréalisme et la Peinture*, Gallimard, 1979, p.46.
- 6) *Ibid.*, p.4.
- 7) *Ibid.*, p.46.
- 8) *O.C. I*, p.743.
- 9) *O.C. I*, p.1557.
- 10) アンドレ・ブルトン、巖谷國土訳『ナジャ』(岩波書店)、299頁。
- 11) *O.C. I*, p.781-782. 生田耕作訳『超現実主義宣言』(中央公論社)、1999年、80頁。
- 12) Michel Carrouges, *André Breton et les données fondamentales du surréalisme*, Gallimard, coll. « Idée ».

- 13) *O.C. I*, p.1557. 邦訳『ナジャ』、299 頁。
- 14) *O.C. II*, p.209. 足立和浩訳『通底器』（現代思潮社）、1978 年、183 頁。引用は訳語を一部変更。
- 15) 『ミノトール』誌 7 号、1935 年 6 月に掲載。1934 年 8 月に他誌で発表する予定もあったらしい。
- 16) *O.C. II*, p.711.
- 17) Stéphane Mallarmé : Poésies, Gallimard, coll. Poésie, p.29.
- 18) とくにシモヌ・ド・ボーヴォワール、『女ざかり』（上）（下）（紀伊国屋書店）
- 19) シモヌ・ド・ボーヴォワール、ボーヴォワール『第二の性』を原文で読み直す会訳『第二の性』（新潮文庫）、464 頁。
- 20) *O.C. II*, p.167.
- 21) 『通底器』に掲載されている写真は、『デリラ』ではなく、『サムソンとデリラ』（1882 年）と題された水彩画である。ところが、本文でとりあげられている『デリラ』と題された作品には、二種類あって、ひとつは 1896 年に制作された油彩、いまひとつは 1895-90 年頃に水彩の大胆な筆触で描き起こしたベンデッサンである。それを見るために 16 歳～17 歳のブルトンがリュクサンブール美術館に足しげく通った水彩の作品というのは、『サムソンとデリラ』しか考えられないのではないだろうか。ピエール＝ルイ・マチュー『ギュスターヴ・モロー』（三省堂）、1980 年、参照。
- 22) *O.C. II*, p.160. 邦訳『通底器』100 頁。
- 23) *O.C. I*, p.651. 邦訳『ナジャ』、21 頁。
- 24) *O.C. II*, p.168. 邦訳『通底器』、114 頁。
- 25) *Ibid.*, p.168. 邦訳、114 頁。
- 26) *O.C. II*, p.182. 邦訳、138 頁。
- 27) *O.C. I*, p.821. 邦訳『超現実主義宣言』、161 頁。
- 28) *O.C. I*, p.823. 邦訳 164 頁。
- 29) *O.C. II*, p.167. 邦訳『通底器』、113 頁。
- 30) *Ibid.*, p.1402.
- 31) ツィンマーワルトは、スイス連邦ベルン州の村の名で、1915 年にそこで国際会議が開催されたことによって、反対派社会主義者の国際的結集運動をツィンマーワルト

運動と呼ぶ。「大戦勃発に際し、ロシアを除く交戦国の社会主義政党の主力が自国政府支持に転じて城内平和を結ぶとともに、第二インターナショナルは機能を失った。これに対し主として中立国の社会主義者が国際連帯の努力を続け、1915年9月5～8日、スイスのツィンマーワルトで国際会議を実現した。参加したのは、推進役のスイス、イタリアをはじめ北欧三国、ポーランド、ルーマニア、ブルガリアの社会主義者、亡命ロシア人の各派、ドイツ、フランスの反対派、計11カ国38名で、城内平和策を批判するとともに、無併合の講和実現を訴え、執行部として、スイス人グリムらからなる国際社会主義委員会（ISK）を選出した。このとき、＜戦争を内乱に＞と主張し、第二インターナショナルの枠を大胆に超えようとするレーニンら8人が＜ツィンマーワルト左派＞を形成した」（平凡社大百科事典による）

- 32) *O.C. I*, p.1592.
- 33) *O.C. II*, p.168. 邦訳『通底器』114頁。
- 34) C.G. ユング・W. パウリ、河合隼雄・村上陽一郎訳『自然現象と心の構造 非因果的連関の原理』（海鳴社）、1976年、参照。
- 35) ヤッフエ篇、河合隼雄訳『ユング自伝 2』（みすず書房）1974年、273-274頁。
- 36) *O.C. II*, p.118. 邦訳『通底器』、31頁。
- 37) *Ibid.*, p.157. 邦訳、95頁。
- 38) *Ibid.*, p.179. 邦訳、133頁。
- 39) スーポーとの例は、『ナジャ』の挿話。*O.C. I*, p.658.参照。ジャコメッティとの例は、『狂気的愛』第三章。*O.C. II*, p.705.参照。
- 40) *O.C. II*, p.184. 邦訳『通底器』、141頁。